

## 展示紹介

# 東京大学本郷キャンパスの 弥生・古墳時代 —近年の出土品から—

三木健裕

2021年12月16日から3日間、文京シビックセンター1階ギャラリーシビックにおいて、文京区内の博物館が集合し展示を行う企画、文京ミュージックフェスタが開催された。本館は東京大学埋蔵文化財調査室の協力のもと、東京大学本郷キャンパスから出土した弥生時代、古墳時代の遺物に関する展示を行った。以下では、展示に関する概要と来館者からの反応を述べていきたい。

文京区および東京大学周辺は、弥生時代研究の歴史と深い関わりがある。1884（明治17）年、旧向ヶ岡弥生町で、有坂鋁蔵らが弥生式土器第1号となる壺形土器を採集した（正確な出土地点は不明。本館所蔵、重要文化財）。この発見をきっかけに、この壺と同様な装飾などの特徴をもつ土器を「弥生式土器」、さらに弥生式土器が使われた時代を弥生時代と呼ぶようになった。こうして弥生式土器第1号の壺は、時代名の定着とともに学史的な重要性の高い資料となった。

今回の展示では、近年の本郷構内遺跡の発掘調査で新たに見つかった弥生・古墳時代の考古資料を紹介し、旧来の学術標本と比べることで新たな光を当てようと試みた（図1）。これらの考古資料は東京大学埋蔵文化財調査室に所蔵されている。

第一の資料は、浅野地区工学部武田先端知ビル地点からの出土品である。2001年、弥生時代後期後半の方形周溝墓2基が発掘され、周溝からは壺形土器（図2）が、埋葬施設からは24点のガラス小玉と4点の赤色石製管玉が出土した。過去の発掘調査によって、この方形周溝墓の北側には環濠集落が存在したことがわかっており、本地点はその集落の墓域として評価できる。本館が所蔵する弥生土器第1号壺は、集落をとり囲む環濠周辺のどこかから出土した可能性が指摘されている。

第二の資料は本郷地区医学部附属病院臨床試験棟地点の出土品である。先の浅野地区から小さな谷を一つ隔てた本郷地

区では、数十軒の古墳時代前期や中期の竪穴住居址が見つかっている。今回の展示では、このうちの1軒から出土した小型土器4点と勾玉を出品した。本地点の竪穴住居址群の西側には、古墳時代の墓域も確認されている。以上の考古資料は、本郷キャンパス周辺に暮らした弥生時代から古墳時代にかけての人々の生活を復元するだけでなく、弥生式土器第1号壺をはじめとした旧来の学術標本との比較検討により、将来の学術研究を進展させる重要な素材となるだろう。

わずか3日間の展示であったものの、今回は370名の来館者に足を運んでいただいた。本館の展示ブースは会場入口付近に位置し、アンケートでは来館者の印象に強く残ったという回答が得られている。今後も文京ミュージックフェスタを通して、地域住民の方々にさらに本館を周知・理解いただく活動を継続していきたい。



（本館特任助教／西アジア考古学）



図1 文京ミュージックフェスタでの展示の様子。



図2 浅野地区の方形周溝墓から出土した壺形土器。